FOR IMMEDIATE RELEASE KOTARO NUKAGA

「Dual Doodle Double Square」

小金沢健人

KOTARO NUKAGA（天王洲）では、7 月 7 日（金）より 8 月 31 日（木）まで、小金沢健人の展覧会「Dual Doodle Double Square」を開催いたします。小金沢は武蔵野美術大学卒業後、1999 年に渡独、ベルリンを拠点に活動。Manifesta（2002 年、フランクフルト）、Sharjah Biennial（2003 年、UAE）、横浜トリエンナーレ（2005 年、横浜）、アジアンアートビエンナーレ（2009 年、台中）、あいちトリエンナーレ（2010 年、愛知）などの大型国際展に参加。「KOGANEZAWA」（2009 年、Haus Konstruktiv、チューリッヒ）、「動物的」（2009 年、MIMOCA、丸亀）、「LUFTLINIEN」（2012 年、Haus am Waldsee、ベルリン）、「PAINT IT BLACK」（2016 年、Stadtgalerie Saalbrücken、ザールブリュッケン）など国内外の美術館での個展も行われてきました。2017 年に帰国し、現在は東京を拠点に活動をしています。

小金沢は「映像」における「時間と空間」、さらにはその運動性を起点にドローイング、インスタレーション、パフォーマンスへと表現領域を拡張し、複合的なコミュニケーション言語の開発を通して、世界の新たな捉え方を提示するアーティストです。本展「Dual Doodle Double Square」にて小金沢は、対となったドローイングと、映像のプロジェクションによるインスタレーション作品を提示し、新たな表現領域と知覚体験の提示を試みます。

小金沢の作品の特徴は「映像」というメディアそのものをアウトプットされるオブジェクトワークとして用いるのみならず、画家の筆や彫刻家の鑿、写真家のカメラのように、その制作段階でも表現に影響を与える道具として用いる点が先ずあげられます。本展に提示された対になったドローイングは、三脚に取り付けられ、一定の速度で首を振るように設定されたカメラの前で描かれています。アーティストはカメラに取り付けられたモニタの画面に映った自身の手元、つまり絵画「全体」ではなく「部分」だけを見るようにし、2 枚の紙の重なりを自身の視界（カメラモニタ）の中に入るように動かしながら、その重なりの部分にドローイングを描きます。それによって、常に変化をするカメラの「動き」はアーティストの視界に変化を与え、ドローイングの表面に間接的に影響を与えることになります。制作時間は一眼レフカメラの連続

撮影可能時間というカメラ産業の制約的な時間に起因しており、その制作時間の終了によって「2 枚のドローイング」と「ひとつの動画」という作品が同時に生み出されることとなります。これらの種類の違う作品には、ふたつの異なる「時間」に対する感覚が織り込まれています。

小金沢はこの時間軸が織り込まれた自身の作品制作を音楽的であると説明します。本展に先立って、ベルリンのギャラリーLOOCK にて行われた個展「Double Sister, Divided Brothers」で本作の特徴を「レコード盤と音楽の関係」を比較することによって、理解を促すように説明しています。この点への考察が小金沢の作品への深い理解へとつながると考えるため、まずは LOOCK での展覧会でのテキストを紹介させていただきます。

In this sense, vinyl records are peculiar things. To appreciate them, one can only listen to the linear series of sounds in sequence and from the start, but when looking at the grooves etched on the surface, visually, all the sounds are occurring at once. Speaking to this work, every moment of a drawing's creation is documented on video and the ultimate result is a drawing being split into two sheets. One action of drawing generates one video and two sheets of paper. Is this the birth of twins? Or a singleton torn apart? Like Cubism coming from opposite directions, the act of drawing is preserved in the time of two different formats[i]*.*

レコードというものは不思議なもので、それを鑑賞するためには、頭から順番に線的な音のつながりを聴いていくしかないが、盤面に刻まれた溝を見ていると、視覚的には全ての音が一度に鳴っている。この作品においても、ドローイングが描かれた全ての瞬間は映像で記録されているが、最終的には 2 枚に分かれた紙ができあがることになる。1 回のドローイングから、ひとつの映像とふたつの紙が生成される。双子を生んだのか、ひとりが分裂したのか。逆方向からのキュビズムに似て、ドローイングという行為はふたつの違った形式の時間に保存された。

二一世紀を代表する SF 作家、テッド・チャン（Ted Chiang, 1967-）の短編小説「あなたの人生の物語」を基に制作され 2016 年に公開された映画「メッセージ[ii]」で、エイミー・アダムス（Amy Lou Adams, 1974-）演じる言語学者である主人公のルイーズ・バンクスは「ヘプタポッド」と名付けられた 2 体の地球外生命体と交信を試みました。「ヘプタポッド」の文字によるコミュニケーションは 2 本の触手のような先から墨を吹き付けるようにして「すべてを一度に」表し、「時制」の存在しない非線形の表意文字によるものでした。人類は話し言葉に合わせた表音アルファベットを用い、それによって前から順に「自制」に捉われ世界を対象化するため、「ヘブタポッド」の「すべてを一度に」表現する表意文字の意味するところを理解することには困難が伴ったのです。物語が進み、徐々に彼らの言葉への理解を進めるうち、つまり、バンクスが彼らの言語をメディア（媒体）として使用し、理解していくうちに、彼女はまだ起きていない出来事の記憶を持つようになるなど、これまでとは違った「時間」の知覚を得るようになっていくというのがこの映画の内容でした。

この「ヘプタポッド」とのコミュニケーション描いた映画のテーマと、小金沢が示したレコードと音楽の関係、さらには、本展における「二つのドローイング」と「ひとつのビデオ」、これらにはわたしたちが「全体」と「部分」をどのように捉えるのか、つまり世界をいかに認知するのかという点において、類似性を見出すことが出来ます。

『メディア論』の著者として知られる、マーシャル・マクルーハン（Herbert Marshall McLuhan、1911-1980）は、「すべてのメディアは、本来的に、それ自体でそれらが伝えるメッセージに関係なく、人間と社会に抗しがたい影響を与える」[iii]

と主張してきました。

マクルーハンは、先史時代の人類は五感の調和を保って存在しており、聴覚、嗅覚、触覚、視覚、味覚の全てを等しく使い、世界を知覚していたといいます。しかし、技術革新によって、わたしたち人類は、自分たちの五感の能力の一部を拡張し、バランスを変化させてしまいました。マクルーハンによれば、表音文字としてのアルファベットの発明、活版印刷の発明によって、わたしたち人類の知覚は視覚偏重となってしまったとしており、その変化を以下のように説明しました。

> 聴覚―触覚型部族的人間は、集合的無意識を共有し、神話と儀式でパターン化された魔術的で統合的な世界に住み、その価値観は神聖で絶対です。それに対して、文字使用的あるいは視覚的人間は、かなり断片化され、個人主義的で、明示的で、論理的で、専門化され、超然とした環境を作りだします[iv]。

言語の発明後、現在を生きるわたしたち人類は「原因が結果を生み出す」というように因果論的に世界を認識していますが、表意文字によって世界を表現する「ヘプタポッド」の認識は過去・現在・未来を同一視する、いわゆる同時的認識様式に基づいたものとなります。表音アルファベットの発明、技術革新によるメディアの発展がわたしたちの世界の知覚の仕方を視覚的に拡張する一方で、本来のわたしたちには「時間」に対する失われた知覚が世界との間にはあったのではないかとも考えられます。

一方、アメリカの人類学者のグレゴリー・ベイトソン（Gregory Bateson, 1904-1980）は著書『精神の生態学へ』の中で、

> *パターンづけられた全体のなかの、部分間の関係の親和性や不和 ―その他あらゆる関係のありよう―がそれ自体、より大きな全体の一部として情報を担っている[v]。*

というコミュニケーションの構造を示し、人間から失われてしまった「優美さ」をプリミティブな芸術のスタイルを分析する中、精神の部分間の統合としてその本質を探り以下のように示しました。

> *「作品が内包するメッセージ素材のどの要素が、芸術家の心の（意識から無意識へ至る）どの階層と結ばれているのか？」（中略）芸術とは、さまざまな層の無意識からの伝達の実践であると言える。あるいは、この種のコミュニケーションがより十全に行われるようにわれわれの精神を鍛錬することを一つの機能とする、一種のあそびの行動であるとも言える[vi]。*

小金沢の本展における作品は、マクルーハンやベイトソンが示したコミュニケーションの発展のなかで、わたしたち人類が失ってしまった「時間」に対する知覚の問題であり、人間から失われてしまった「優美さ」がテーマになっています。前述したレコードを例にした小金沢のことばはまさにそれを示しています。聴覚を通し、時間軸をもった音楽を前から順に最後まで聞くこと。そして、視覚的にレコード盤の表面に刻まれた音楽全体を一度に見るということ。この二つの異なる音楽に対する知覚は因果関係という「時制」の概念にとらわれなくなった時、どちらも「ひとつの全体」を示した同一のものとして知覚できるものなのです。

前述した映画「メッセージ」はこの失われてしまった「時間」に対する知覚がテーマとなっていました。小金沢が自らの

制作スタイルを通して再現し、その中から生まれ出てくるものとして提示しようとしているものも、この失われた「時間」への知覚に関するものであると考えられます。小金沢は本作で、自ら設定した制作条件により、意識的にアーティストは「部分」へと意識を向けることとなります。しかし、それによって生み出される「2 枚のドローイング」と「ひとつの動画」というものが示すものは、精神の部分間の統合によって生み出された「全体」となります。小金沢はカメラモニタを通し、常に「部分」を鳴らし続けながら、アーティストの意識の外に「すべてを一度に」知覚する意味に溢れた「優美な全体」をひとつの全体として作り上げます。これは、「すべて一度に」という、わたしたちの失ってしまった世界を捉える知覚の構造なのかもしれません。これによって生まれる「2 枚のドローイング」と「ひとつの動画」に織り込まれた時間が「ひとつの全体」として知覚されるようになった時、つまり、本展において提示された小金沢のインスタレーションが一つの全体として輝きを放ち始めた時、そこに、わたしたち人類が失ってしまった「時間」によって知覚する世界の姿が「優美さ」とともに立ち現れるのではないでしょうか。

---

[i] Takehiko Koganezawa – Double Sister, Divided Brothers at LOOCK（Berlin）

[ii] 「メッセージ」（原題：Arrival）は、テッド・チャンの短編小説「あなたの人生の物語」を基にエリック・ハイセラーが脚本を執筆し、ドゥニ・ヴィルヌーヴが監督を務めた 2016 年のアメリカ合衆国の SF ドラマ映画。出演はエイミー・アダムス、ジェレミー・レナー、フォレスト・ウィテカーらである。2017 年のアカデミー賞 3 冠（監督賞・主演女優賞・脚色賞）

[iii] マーシャル・マクルーハン「プレイボーイ・インタビュー―大衆文化とメディアの形而上学の司祭とのざっくばらんな対談」、エリック・マクルーハン＆フランク・ジングローン編『エッセンシャル・マクルーハン メディア論の古典を読む』、有馬哲夫訳、NTT 出版、2007 年、p. 16

[iv] マーシャル・マクルーハン、前掲書(ⅱ)、p. 24

[v] グレゴリー・ベイトソン「プリミティブな芸術のスタイルと優美と情報」『精神の生態学へ（上)』、佐藤良明訳、岩波文庫、2023 年、p. 287

[vi] グレゴリー・ベイトソン「プリミティブな芸術のスタイルと優美と情報」『精神の生態学へ（上)』、佐藤良明訳、岩波文庫、2023年、p. 297

【開催概要】

「Dual Doodle Double Square」

会期: 2023年7月7日(金) - 8月31日(木)

開廊時間: 11:00 – 18:00 (火-土) ※日月祝休廊

会場: KOTARO NUKAGA（天王洲）

住所: 〒140-0002 東京都品川区東品川1-33-10 TERRADA Art Complex 3F